

研究経過報告 ——昭和62～63年度前半

田 畑 治

1. カウンセリング過程の研究 このテーマ領域では2つの公表された論文を得ることができた。1つは、対人関係の治療に関するもので、その方法論を展開したのうち、ある対人関係障害に悩む男性成人の心理治療過程を臨床事例研究として行ったものである(大橋正夫・長田雅喜編『対人関係の心理学』有斐閣, 375-392頁, 昭和62年8月)。もう1つは、この数年に涉って一連のシリーズでまとめている中年婦人のカウンセリング援助に関するものである。今回は「中年期に子ども喪失体験をもつ婦人のカウンセリングの特徴」と題して、臨床事例研究を行った。ここでも2事例研究である(本紀要, 第35巻, 97-107頁, 昭和63年12月)。今年度は(財)シキマ学術・文化振興財団の第3回(昭和62年度)研究助成金を得て、「転換期における成人女性の生き方の心理的変容過程に関する臨床的研究」というテーマで、さらに統合的に発展させる予定である。

今後とも、個人ライフサイクル、家族ライフサイクルそれぞれの転換期でのさまざまな心理臨床的援助の必要性は高まってくると予想されるであろうし、さまざまな形態の援助——個人カウンセリング、グループカウンセリング(エンカウンター・グループも含む)、臨床的地域援助(危機介入を含む)が要請されるであろう。

カウンセリングの方法論に関して、以下のものが公刊された。「青年期の対人関係とカウンセリング」(西平直喜・久世敏雄編『青年心理学ハンドブック』福村出版, 603-625頁, 昭和63年3月)では、青年期の対人関係の系、その諸様相、児童期とのちがいなどを論述し、青年期カウンセリングのねらい(意義)とカウンセラーの自己理解・態度・技法について論じた。「カウンセラーの資質」(松原達哉編『カウンセリング入門』(学校カウンセリング講座第1巻)ぎょうせい, 11-21頁, 昭和63年2月)では、カウンセラー(志願者を含む)の性格・倫理、素養・教養、容貌・行動・心身の健康について概説した。その他「カウンセリングの理論(岡堂哲雄司会、茨木俊夫との対談)」(クライエント中心のカウンセリング」(岡堂哲雄編『現代のエスプリ』特集: カウンセリングの理論, No.252, 至文堂, 9-42頁および122-136頁, 昭和63年7月)、「カウンセリング過程にかかわる技法」(岡堂哲雄編『現代のエスプリ』特集: カウンセリングの技法, No.253, 至文堂,

41-54頁, 昭和63年8月)が出版された。

なおわが国のカウンセリング・心理療法の発展に多大な影響を与えた故C. R. ロジャーズ博士(1987年2月4日逝去)の追悼を兼ねて開催されたシンポジウム「心理療法の今日的課題を問う」で、司会者としてつとめることができたことは幸いであった(日本心理臨床学会第6回大会企画シンポジウム, 昭和62年11月, 名古屋大学: 同シンポジウム記録(非売品), 昭和63年5月, A J U わだち作業所発行)。

2. 心理臨床家の養成, 教育・訓練の問題 昨年11月わが名古屋大学でお世話した日本心理臨床学会第6回大会の総会で、「日本臨床心理士資格認定協会」設立のための予算拠出が決定され、今年3月8日にこの協会が正式に発足した。これは、わが国における臨床心理士、心理臨床家の資格認定制度が公的に確立され、その認定業務がスタートするという画期的な出来事であることを意味する。そして今年9月1日から第1回目の資格認定の審査が開始される運びになっており、目下審査中である。

このことによって、心理臨床家の養成, 教育・訓練の問題に関して、大学の役割、とりわけ文部省の省令外特別施設である「心理教育相談室」を併設する五大学の役割は、より重要である。そこでは、如何に有能な臨床心理士、心理臨床家を育て上げていくか、教官スタッフの責務は重いのである。教育、研究のみでなく、治療・援助実践やスーパーヴィジョン機能もますます大きい比重を占めてくるであろう。これは社会的責任、倫理的規定も伴うので、ことは重大である。さらに大学院カリキュラムも、より整合性のあるものに整備・統合されなければならない。幸いわが大学・学部でも将来計画検討委員会をはじめとして前進しつつあることは、喜ばしいことである。

臨床心理士に関する評論として、つぎの2編を依頼された。「精神医療教育の展望——臨床心理士の場合」(『法学セミナー』増刊: 総合特集37号「これからの精神医療」日本評論社, 192-198頁, 昭和62年8月)、「臨床心理士とは」(『日本医事新報』No.3339, 140-141頁, 昭和63年4月)。いずれもわが国における戦後の臨床心理学の発展の歴史の中で、資格問題が迂余曲折して、ようやく日の目を見るようになった経過を述べた。

心理臨床家の教育・訓練はたゆまず継続されていかな

ければ、腕は上がらず、錆びついてしまう。また自分に対しても絶えず錬磨を行っていかなければならない。他の心理臨床家への事例研究のコメントは一つの修業の場と機会になっている。高野英子氏（武蔵野市教育研究所）「闘病者Oさんと心理療法家とのかかわり」（日本心理臨床学会第6回大会，名古屋大学，昭和62年11月），豊田英子氏（武蔵野市教育研究所）「公立教育相談所における中断ケースについて」（日本心理臨床学会第7回大会，東京都立大学，昭和63年8月），「角田論文——自閉傾向をもった中学男子の事例——へのコメント」（『臨床心理事例研究——京都大学教育学部心理教育相談室紀要』第15号，昭和63年12月予定）の3つの発表へのコメントであった。

最近，心理臨床関係学会でプレ・ゼミのかたちで研修会（ワークショップ）が持たれ，会員の教育・訓練に資する場や機会となっている。昭和62年度はワークショップ『カウンセリングの方法と実際』のなかで「カウンセリング過程における諸問題」（日本相談学会研修会資料集，東洋大学，21-23頁，昭和62年5月）の講師をつとめた。その他，〈テスト情報〉として「日本心理臨床学会第6回大会レポート——心理テスト関係の研究発表を中心に」（日本心理適性研究所編『心理測定ジャーナル』，第24巻1月，23頁，昭和63年1月）を報告した。

3. 臨床青年心理学，学生相談，エンカウンター・グループなどへのアプローチ この領域では，3つのまとめがなされた。1つは，民間のジェネラル・グループに関するもので，筆者がエンカウンター・グループのファシリテーターを体験したなかでもっとも好印象をもったものである（「対人関係の訓練」大橋正夫・長田雅喜編『対人関係の心理学』有斐閣，339-374頁，昭和62年8月）。もう1編は，本学学生相談室主催による人間関係体験セミナーのものである。連続11回のファシリテーター体験であり，すっかりおなじみになった学生グループである（「Aグループのグループ・プロセスの概要」伊藤義美氏と共同執筆，「人間関係体験セミナー——中津川でのグループ体験——」（昭和62年度厚生補導特別企画・第11回人間関係体験セミナー）名古屋大学学生相談室，9-13頁および26-29頁，昭和63年3月）。3つめは，「重い障害をもつ学生の個人カウンセリングとグループ・アプローチ」（第21回全国学生相談研究会議，山口大学，昭和63年1月：同報告書75-80頁，昭和63年10月）である。これはある境界例学生の個人カウンセリングを延べ99回の面接で終了したが，このシンポジウム「学生相談におけるグループ・アプローチをめぐって」では，かかる重い障害をもつ学生が，エンカウンター・グループにも混入してくる際の，個人カウ

ンセリング担当者とエンカウンター・グループのファシリテーターとの連携の問題，留意すべき事項等を，この学生が表明し，認知していることを手がかりとして報告したものである。エンカウンター・グループでは，すべての参加者に“心理的損傷”を負わせないために，最大限の配慮をしなければならないのであるが，この事例は，その原点を指し示してくれた貴重なものである。

4. 教育臨床，教育的人間関係の研究 この領域で特筆すべきことは，何といたっても村上英治教授のご停年退官記念出版である。教授の教育心理学に培われる人間への情熱と飽くことのない探究心に導かれて，当教職員をはじめ，教室にかかわりのあった学外の諸先生方の協力を得て，退官記念祝賀会当日に出版が間に合ったことは，関係した者の一人として感慨深いものがある。特に各自の“自分史からの出発”は，ユニークであると考えられる。筆者は「教育心理学研究」における実践性」を連ねさせてもらった（村上英治編『教育心理学への歩み』川島書店，61-78頁，昭和63年3月）。これは，日本教育心理学会第29回総会での研究委員会主催シンポジウム『教育心理学研究』の方向性とあり方を考える——最近の動向を通して——で，同一題目の発題をしたものを下敷きに加筆したものである（『教育心理学年報』1987年度，第27集，26頁，昭和63年3月）。

学校教育病理現象およびそれへの対応としての学校カウンセリングなどに関し，以下のような論評や報告をまとめた。「嫌われっ子（いじめられっ子）を見る」（『児童心理』4月臨時増刊（第41巻第5号）特集：子どもを見る眼——親の眼・教師の眼，18-19頁，昭和62年4月），「子どもの不適応は“問題”か」（伊藤隆二・坂野登編『子どもの性格と社会性』（講座・入門子ども心理学シリーズ第3巻）日本文化科学社，144-169頁，昭和62年4月），「教師の人格的成長とは——カウンセリングにおける主体とその資質を考える」（『児童心理』6月臨時増刊（第41巻第8号）特集：カウンセリング・マインド，31-37頁，昭和62年6月），「学校カウンセリング」（原野広太郎・小嶋秀夫他編『児童心理学の進歩1987年版』金子書房，第26巻，254-281頁，昭和62年6月）。

なお，登校拒否の小・中学生に関し，過去3カ年に涉って2度の実態調査をもとに，その対応策として「治療教育相談センター（仮称）」を提言する報告書を答申した（名古屋市学校教育研究協議会・代表者橋爪貞雄「登校拒否の児童生徒の指導をどのようにしたらよいか」報告書，1-7頁および13-25頁，昭和63年2月）。この答申は，全国から注目のまとなっている。登校拒否の児童生徒および親への，一石を投じる試みが，現在

実施にうつされようとしている。

5. その他の活動

- ①「変わる「ライフサイクル」」(村上隆助教授と連名, 昭和62年度ラジオ放送公開講座「転換期の教育を考える」37-42頁, 名古屋大学, 昭和62年10月)。

- ②「人格の理論」(久世敏雄編『教育の心理』名古屋大学出版会, 178-191頁, 昭和63年4月)。

- ③「来談者中心療法」(田中富士夫編『臨床心理学概説』第Ⅲ部臨床的介入——個人心理療法(第10章), 北樹出版, 131-143頁, 昭和63年11月)。

(昭和63年8月27日記)

研究経過報告

速水敏彦

名大に着任してのこの一年は前任校とは異なる学部内の慣行や教室内の指導体制にとまどい右往左往してまたたく間に過ぎた。学生時代を過ごした場所であり、勝手知ったるところとたかをくくっていたが12年間も教員養成大学で過ごしたせいか慣れるのに思わぬ時間がかかった。2年前に「教室場面における達成動機づけの原因帰属理論」で博士号の学位を取得し、研究過程での一つの区切りをつけて以来、新しい研究の方向を模索している。だが、上述のような事情もあり、まだ明確な将来の方向を見いだすには至っていない。そのような状況下での遅々たる歩みの研究活動をまとめてみるならば次のようになろう。

① 動機づけに関する研究活動

学習の目標がなにか、何のために学習するのかという達成目標という視点からも動機づけを考えることができるがその枠組みからの研究を昨年度の名古屋大学教育学部紀要第34巻に報告した。その後、この研究を基礎にしつつ、Dweckの提唱している成績目標、学習目標を核にした動機づけ過程のモデルを参照にして中・高校生の学習動機づけ過程の検討を大学院研究生および大学院生の伊藤篤、吉崎一人両君と進めている。これはDweckのモデルにかなりの部分修正を加えようとするものでその成果は学会誌に投稿したいと考えている。

以前から行ってきた達成動機づけの原因帰属の問題に関しては先の両君とともに本紀要に掲載したような検討を行った。これまで学業成績の原因帰属が誰にも当然なされるかのように考えられてきたが今回は自発的原因帰属がなされているかどうか特に着目した。また、昨年の日本心理学会第51回大会で鈴木康平教授を企画者とするシンポジウム「帰属過程の研究——最近の動向と今後

の問題」にシンポジストの一人として「教育事象の帰属過程」について発言する機会を与えられたことは幸運であり、Weinerモデルの限界や今後の発展についてじっくり考えることができた。

他に、村上英治教授の退官記念の書「教育心理学への歩み」(川島書店)で「動機づけ研究の周辺」と題するエッセイ風の論文を書いた。これはこれまでの動機づけ研究者としての自分の足跡を振り返り、これからの自分の研究方向を意識しつつ最近の動機づけ研究の動向を論評したものである。そこに述べたことはこれからの自分の研究課題のひとつであり、そういう機会を得たことは誠に有意義であった。教育雑誌には「学習動機の転換期を考える」(教育研究, 43巻, 3号)を執筆した。

② 教授心理学に関する研究活動

日本教育心理学会第29回総会で北尾・中村との連名で「教授スキル評価の視点に関する検討」を発表した。この詳細は近く教育工学雑誌に掲載される運びとなった。また、同じく昨年の日本教育心理学会のシンポジウム「学力の個別差にどう対応するか」でシンポジストに選ばれた。そこで全く専門外ながら、能力別学力編成の是非について論じるよう命ぜられ、あわててその種の勉強を開始することになったが自分の守備範囲を広げる意味で結果的にはよい経験であった。さらに、教授行動に関連して「子どもの個性と教師のきびしさ 目標のもたせかた」(児童心理, 41巻, 10月号)も執筆した。また、まもなく発刊される「応用心理学講座9 教授・学習の行動科学」の「学業不振と教授行動」の章を北尾と共著で分担執筆した。

その他、授業の中で最近よく実施されている自己評価に関してはかねてから関心を抱いていたが本学部の教育